附句註解

麦水

911.3
ツ
上

洒落者の失ひたるを信ずる是ニ於て一朝震哀
桃李の掛ひ今世に宗とする人筆の力を捨ひ女
門之紀意者の写して十二巻の拙塩者の作る
巻々いふものゝ表と屋者者の何としてなる
繊脳中にも入て裏にも力を用ゆ擲故舊社
一葉者の流に志して櫃に於る人の斗ミ傍
手鮮遊にも作に遊子法の集ち也者の筵に語る
にる渡者の流の是大きに神に於て遊ふ也

侍者求めなし寄所廣く通ずるを雁言
とく関屋にかゝるや路をしひるへのに書状き
すゝめき隠く集ひ帰らん事を指揮しを
選ふやすらへ行んハ草稿乃ちのきたる衛なり
澀只象に帰るを是慈門好学能意者てらしく
他者にる信者こそ修顆して附る往庭と作る
安永未冬のはしめ
北陸
牛口山人麦水書

附言

[illegible]火親しく[illegible]
[illegible]を懼る故に[illegible]すゝ[illegible]
[illegible]を傷めて白くを討論を
坐間に濁を兼者菖蒲有折に問に
既に取要く菖蒲なる事を進ぜ曰
牛山人の説又是を聞折[illegible]
[illegible]八くを[illegible]宵の評話を[illegible]
無からいけん我[illegible]他の徒[illegible]
得へ[illegible]也又[illegible]土の志やを[illegible]

砕眠又侵を傷人既に草薬を
懷ひ[illegible]追へ[illegible]不及[illegible]朝日
徒らに言を射る変に[illegible]
[illegible]を[illegible]傷君に告ゝ評解
の[illegible]八白くを[illegible]只傷人の
問に答へ[illegible]
よく[illegible]
[illegible]に出る[illegible]
[illegible]志[illegible]

故に表水再び賛言を

歌仙仟

尾張　曉臺

やゝ去はゝ　海の中乃抑ゝ
一雁　ゆく　ゝ　詩ゝ少ゝ　春　一蒐
寒ゝ食ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
迄ゝ　ゝ　ゝ　人　を　負ゝ　ゝ
ゝの角力を更　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
新長ゝ　ゝ　乃　鞆　ゝ

身ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　小松　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
面ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
帆のゝ　ゝ　ゝ　町　中乃川　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　女の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

閑閑ふ住の山家乃青ふ[illegible]
[illegible]く[illegible] 仏地ふ[illegible]
月いりく姨捨山ハ[illegible]雪
[illegible]火ゑ乃けく 捨[illegible]を焼
之如支の[illegible]
京[illegible]ちうゑ乃寺を尾月ふ
[illegible]の森を[illegible]追きつる
[illegible]そ[illegible]し 鐘いつくゝら

[illegible]祇の強ち[illegible]
師ふ事くゝ[illegible] 城内を使者
[illegible]紙 枯[illegible]いゝ[illegible]のまとハしき
而の名[illegible]
妙茉
何ゝふ女嬬や 采女ゝ[illegible]ふ
せ[illegible]盃[illegible]
牛 偶ふかゝ[illegible]月ゝ明迫く
[illegible]を[illegible] 市人

明年乃そこよと明ハあれとさる

園車の森奥乃さも逞しく

笈摺さん吉きを足袋も連てこそ

笥の遠より火のつるる仲

この陰を乃往ハ花の山ゆきな

田中往道ふむ乃ん

○梵発句　去景の勢艶やい吉翁の新きあて前子ゝ

進む真ふ所以あるう邪

○初服起り乃猶心を関とるふ壱中皆異殊の玉象ゝ

如くおもしいんも今文ふ〻〻作句ハ前句ふ従ふ百祢一ふ

非ス志ゝもよく去我を將ー表裏の又波ーをんゝ乃ゝて發句

を学句迄ゝー又拳句ゝ発句迄迴文歌此ー唱ふゝも

一形ゝも舌頭ふかゝらん調伴ゝをよーゝを此ゝ、ゝをそふ

花也俳門初学の為ゝもんゝゝんよく作者の意を探ゝ

○俳人朱之ふ火神の不審あを答曰去嫌ハ連句のゝ異ゝ

いゝ捉の式目也をゆゝうせふゝるゝふハゝんん氏発句也

煙ハ重姻ゝゝ諸本業為て二名場を非を木の芽けゝる此

ちくと云ふも如法の詞なれども三ツ巴の雖ひみく火鉢の烟ハ淋
ケムリノ三字ハキニ帰ル方越ノ海有へしん

○入日宮食ハ故事ハあるにやあらん 答曰 強ち故事にも拘むへからす
所候のそもあると必竟此句ハ詞ノ上や去り嫌ハ海上へしん之之
月ハ遥れとそ云く明日の指ハ とのうなく訳もあり

○佳の作宮ハ仁和寺の事ハあるへし只今の園生のねもまた
法閣とえて墨義あるべき歟を不詳

花ハ月と相ハ一ハ名所を出す理なり月花ハ二色合とと
のくそくる和尚の人あり是花ハあるへし此名所のあつらひ
嵐ハ一言をも漫ハせる所ハ心を為めの習

○次ハ上品を引そくしく種芋の煮食ひ伝濃おくりは部ハ
味り月ハ芋ハ常ならと種ノ字はそくしき歟

○板名所出しハ別も景色の項ハ雖も出るに寺を尾目と不ハ
衣ものの表白意とひ書ものの附也

○三夫婦とハ意の巴ハ尾目と詞なりは意のあらハ也
右の意情為れも女婦や宋女と嫌出ハ家ハ重さ
志ハ間ハ宮ハ数情を重せり

○解る妙案ハ信ある句ハ句上は表ハ芋ハ句なし

○家を出る市人ハ表ハ出れく 明年ハ月のさしくと囲車の子
遥しくあるとはぶるも田舎生れたや野性の義ハ
又嫌也代陪句二句一意の類也前の明りて 雪ハ
一句よく年別あり

浪花 大魯

畫船や奥うち揚る紗のうへ ヽ

綫の萍藻乃日尓白よ道 蕪

旅の空市は仮家尓賑らせて ヽ

きぬあそい孫しり時のうつきや ヽ

亀幸く月影向よ 高杯ツギ ヽ

蘭へのあとさし蘭乃みだれ菓 ヽ

ウ

涼しや竹樋の乾破レ尓秋の声 ヽ

此寺尽えく およみ 百丁 ヽ

食骨柳を濯んとすれハ小魚ザコ寄 ヽ

宿ある石乃旅の姉し ヽ

あさましやうたうしみの手姿 ヽ

誇りそう程し おやかあらぬか ヽ

浮薬の水も祈の鞭のつれ ヽ

いくも雲母キラヽを下ふたつかし ヽ

寄る人のおとづれハ絶まん云伝を
年の暮るの氣ふやるせなき
賛ゑ出門へ出て見る花乃中
月かすむらん雲のうらく
曲水と次の舟遊しやる
綱を操るを廻板ふ待
業ゑの烟を見越を樓を
雪の朝乃風さへ業る紀

鶴も雲ゑ交加し鶏何業
かこふ系里駕籠を昇里
系等しきの軒を牧ふを拾し
やつと家も雲ゑまりふ系
忍ゑと篠つく雲ゑ西傾
尚の山ふ夕日かいやを
作通を書ても月よ紅葉時
雲ゑ別きん蛙と宮の森

二ウ

跡〻迄のつれを妹も末なるに　蘭

父上敵をそむる路ハ哥(?)　、

時雨しくつきまへあしの片言や　、

算盤拾つれ麻乃ところも　、

生緒に花咲ちらす夕月(?)　、

貝うちよせる春はうらゝ波　、

麦水云

○此発句自ら席物にかゝはられ結構よき趣発句にこそ

○脇ハ其句に法話しつる余韻を取すとなきしれ実は根(?)

もの説情を損ぜらるにべし

○月新句にて森の上に嵐も先つらしきに障子乃立合に

蘭の葉はさまりつる珠にめつらしく風流の難姿

○裏移りは箕の乾坤に秋の部但馬示の縁を潤て

よくもしり後も其容易の句に何られ評をも他人ニ任ス

移りと云ふ第句ハ哀情深し付句もいひそらす背きん眠翁

此夫斧川あて猿をきく人捨子に秋の風いかにと落涙あり哉

売も嗅しきは軒の捨子とて未だ纏りしを気付る

附ことく余情に於きて言語同断也

○西はゝ向の山の夕日古戦の面影人をして　来客を
求めしむ夕日の月と称あゝ年道の書をとゝのふ書。吉
き月よとハ新芸術のゆゑ今宵八月朔そはもの　まて
ゝ家物語をとせとゝのふ白の戸氏三白のつゝりを味　しく
格の苦しむさし合うの信名ゝゝるゆゑ事なれ
○於も神宮の為ゆゑハん家ゝ別まん　ゆく宮乃表とゝゆゑ
歌ゝ宮ゝ作ゝゝ古格　重言　要徒也　古例いゝてゝゝる
○ゆり応変ハ公一ツを吹くゝゝ別あゝ事ゝ赤白の跡の変ハ
ゆの家ゝ別まんゝゝゆ　信友の方法　或を新系物乃師
さ作ゝハ家ゆゑ別まんゝゝゝ　街ゆ立ツ人さは
○ゆハ一物しゝゝ彼神宮ゆ立ゆゆ姫ゆゝゝしき別れ切ゝる
ゆゝゝゝしゝゝゝ　ゝゝ秋も来ゝゝゝゝゝ作ゝゝ

又ハ主姫君の又母と赤白を引ゝゝハゝ作ゝ
ゝ歌へゝゝ　焦門の附肌ハ連奇をよく味ひ習ゝハゝれを得
かゝゝゝ手紙ゝ返ゝゝゝゝ　ゝ別ゝゝゝ
風雅ゝよく味得ゝゝ

播磨
青蘿

松の蟬時雨秋を移りぬ、
日を切り照る映る月代一簾
雲一水往々へもせぬ雲
糸竹へ来へき人とゝゝ
多ゝゝ障子繕ふ閑さ
物さびしき紙屋の青

ウ

月あくれも身を背ける蛇の脱
殼のは任連糸誰ゝ
さるゝも市留の小流こそゆ
霧多しる瓦ゝ乃石
常を庇も寄き竹えか
迷ふ呼ふ千蘭盆乃市
あやふくゝ明まり空ふ月高て
歎まるや歎乃聲

夫婦仕身をとろも忘れ
もしをつれ乃病なるを
ゝ乃ゝを頻に待給ふ
玉の如き乃かたゝ
ゝうちの氷の解ふ日は歩
朝ふゝを世を捨ぬ仏
解好の点もかりゝ産ふ者ゝ
ゝゝ後ゝ後ゝ面後ゝ用ゝ

透ゝ所ゝ八ゝ桶屋ゝ治療の日
狩の仮乃ゝのたゝむま
師を帰ゝ重ゝ古法を口すゝ
かゝ形ゝ山ふ更乃かゝ
月や日ゝ毎の業ゝ元ふ
身を捨ゝ毎ゝ末槽乃底
宿ゝん元の食も変ゝえよ
変ゝ ゝゝ初歩をゝふ

時なるかな　口ずさむ　時鳥　蕉

又うらあけぬる　三人乃　琴

亡後の　掛ごも　家の　蕉

倒しまに　水　模も　拾ふ

秋風に　額突　扇　れくはう

午白　満ふる　月乃　まそゆめ

○此祭り　秋色　寫し得ぬ　又一情を添へ　紙きあり　作

荒る家小屋

○眠亦之　秋景　画のごし　蕉

○又白月　閑なるかな　物さびしき　何を遠　作ずく　聖し

ふる　秋　閑なる　意なり　又作の　一ツを遠く　対するを

○次ハ　鶏を　孫乃　配　田ちの　ふる

投乃　注連に　古皆乃　かくるる　布留の　いさい　ふる

○いそのかみ　注し　ふる　古ふる　ゆの

石のうへ　水白　青き　あり　松も　白鷺　なり

○迷ふ　峠乃　ハ　古ふる　きに　千菊　盆の　中　京都の　草市

都乃　古波羅　祇園　模　求る　中　おすしの　ふる

和哥ろかるをいとゝ哀也さる秀逸乃歌
ゆゑなしんら
○朝かゝのふゝ餘好ハ七人みして好公かし
○遠〳〵又ハ行篇の内ゆゑ稲をろうしゝ神慶八ゝる
乃和ものかゝり京奥ゝ將れ　ゝ繰ゝりゝ　ゝる　ゝ殿を
弦遠〳〵併も仕ん　次ゝ持の使のかゝさ敢ゝ　色ゝのゝた
かゝるこゝ此中將ゝ　ゝ行ゝる又面
○月やゝの白ゝ月亟乃月や此後ハ拳白ゝ又面
又ゝ月の月亟敢ゝ千白ゝの時稀ゝある秋の稲ゝ
做ゝ又次ハ帝白　海上をけゝるゝ〳〵ゝ數ゝ此渡海
ゝ猿見ゝ来敢ゝ省乃羽を受ゝ好ゝる也
月の亟ゝ拳の亟を引上ゝるハけゝゝ〳〵ゝ千ゝ

月ゝ亟ゝ亟乃月敢ゝ月ゝ月ゝ花を出せゝハ連歌
ゝ例ゝ知ゝ
○又ゝ揚ゝ三人の歌ゝ　ゝ者国怨の面氣ゝ好ゝ何ゝ
ゝ物ゝ　ゝ弾ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○ゝけゝ　ゝの花ハ彩色の張ゝ麗ゝ琴ゝ麗ゝの聖ゝ
○拳白ゝ月ゝ表ゝ月の代ゝ也　此例ハ宗祇　伊勢祝

いとゝ清くして西流るゝ多田の郡
桂ゝ柳の糸絮　静なる　一流
藤衣なまれハ星ゝ見なれひて
沼をしまの乃　遠ふなるふ
月の波や花の上乃猫の鈴
ちゝ松く虫は　寒乱ふ

二斯

ゆ
竹あ[illegible]こゝ[illegible]米あなりまし
吹も志つゝそかきくもりなる
ひきゝくを習ゝ　傳を伴りて
乳ふ乳ある子を連ふやを
[illegible]や[illegible]のを[illegible]
三石を[illegible]世ゝハ　孫ふ
月孫し　池[illegible]ふ乳ゝつゝし
ふゝ　紀ふ　[illegible]

五沙の流れをみるに無数にて
ひとりつくるを皆流るなり
家ごとに花ひらき艇をあそぶ
殊に如月　西行の日
二
降まく小雪ちらちらの時
すくまめ屬に敵を打ちて
身を捨るのこと力をしぼる
十に一つ乃逃事まれ

五月雨　水能も常四閑に
かるるくに舟乃　小便
立ツ居ツ世話やきの例しく
浮世の事　驛々　閑帳
こもむらこころあるりも
惜くも佛者に　老行
心く月と角力　に別き
逝　ちちちちち　野道に春　幹

二ウ

すきまや何の果もむ〳〵雑

牛車くやむ[illegible]乃徒

ゐすうしく[illegible]方孫の下部も

雑者う徒しく[illegible]蓋〳〵つる

一〳〵[illegible]不の〳〵[illegible]

霞時[illegible]仲小蓋く

○武聚句 第不風[illegible]あり二ハかしく。[illegible]

水の句を左右[illegible]〳〵 よく四時[illegible]

[illegible]

○脱よし〳〵表代間もかく[illegible]〳〵

つ才三風体の[illegible]意なり[illegible]

哉留の不句[illegible]才三の[illegible]

大[illegible]○哉ふかよ加也[illegible]

の類ハ哉ふかよ[illegible]

かく[illegible]近世[illegible]

んう哉ハ句[illegible]

留〳〵哉ハ[illegible]

此外三句ひとしく人載しいたれども審なれハ載ハかなしめ
ハ〳〵の外三句ハ〳〵　此句毎ハあり
○ちつ〳〵や墓の上ハ秋の白菊ハ此句ハ皮肉ハ入て侍り
又肉章の句毎ハ墓ハ三石ちつれ侍の述懐とハ除て
特〳〵あり去三句のみ味深〳〵
○ハ所いつれも墓の中ハ〳〵ハ墓とよ知る所と
蕉翁ハ白菜や月ハ高〳〵とるのみと考へ合ハ〳〵
○初ハの問ハ曰　秋ハ去ハ〳〵よ西ハの日ハ此句一句ハ
ハ〳〵りといふ　答此句ハ主ハ人ハ〳〵ハ如月ハ西ハの
日ハ前の句中〳〵ハ作り〳〵ハ句ハ〳〵ハ又一
首の作ハ〳〵ハ安ハ朝をあハきハ〳〵ハ秋ハ〳〵ハ
秋〳〵ハ作り〳〵ハ秋ハ〳〵ハ引ハ〳〵ハ作ハ〳〵

雪の〳〵ハ作り〳〵ハ作ハ〳〵ハ可ハ
十ハ一ツの色ハ作ハ〳〵ハ前句又ハ抱〳〵ハ
〳〵ハ身ハ〳〵ハ〳〵ハ如く切ハ迫り〳〵ハ
の句ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ
〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ
群雀の鳴あり何の果りといふ不伸ハ鶴ハ〳〵
ハ車ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ一句ハ〳〵ハ〳〵ハ
〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ
○名ハの花ハ初ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ一ツの雪と也ハ〳〵ハ
〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ
〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ
〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ
〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ

乞巧奠

表六　一音

流れこむ梶の葉捨へ御手洗水

月入まくも月乃友なる　一瓢

二三歌先んじれ古酒を飲く　丶

庭乃艸吹ける　馬乃絵音　丶

干物を莚乃縁尓徒をかさね　丶

おとしもの出てあらく　橘　青きも雲　丶

一

二

ウ

こゝろうきを遠山信尓帆の並ひ　丶

傾く隣　蛙尓和らまる　かくして　丶

居は墨を吐くやくやと知らす　丶

手洗ふしひるふなつくせのさ　丶

けふの空かつまる路ふ新風尓　丶

松よきと言く　鷺は安く〳〵　丶

まやくせ儀行綱は弟し近く　丶

近年は若へてや森入しり　丶

武蔵の国にて小氣も細き
家に暖かなるこのり
氣をさして月にく遠き山道なる
秋さえ日帰りにも日久柴
おもひかねる物もはんに猫はなを
食べ来ぬ食猫を出し
朝ハすさまじあくせくこそ
いつをこそ勝をよせこそ

幸寿八条の私乃うちむらい
松の火新乃更かりけるふ
年寿夏の和くに近き味もなき
少秋と夏記は数をれ切
くけりや新かなしき年かしく
きのふは酔かあるをきを
蓋れを月ちをはきを春風呂か
園扇乃うへ珠数を忘き

二丁

珠の高持に比して世を避て
渇しさくちに水汲んやうなる
数の船千隅に艫を並へつる
いつくりしてやか夜は明になり
地主は花によき先に指掌や
徒し折花見に侍る

麦水云

○其発句要點を得より萬子よく並合すとに云也
○発句に皮肉骨あり附句指其三義なり先ツ脈ハ相對
を先きとし又骨一也発句は有心無心親句疎句をと
くしる吟なしくを斟ふ比句や有文とも無文とも親
しき跡もあへて定りなし只書と早算は紙をのこ
さらやうになしをりて作せし句なるを紙よくも
知をしれるなり
○第三信意にうつして又よく熟せるなり
叔傾様に出し取りて句を並の語取し作く居る其の
身にるを得て筆つきすらくおれしらふ定を今僕は並とる
○されハ九句目の並の並を出せる 寂し 情ふ如くなりもと

いろ〳〵ハ只一口ハかるふいとハ〳〵二白番の〳〵國ノ時ハ
乳も細〳〵憂身ハ[illegible]るよ[illegible]腹和ハ[illegible]
[illegible]もれめる心つゝ貪苦ハ塵る一白哀ふく
妙ゑ殿と乃〳〵くきゝを起情乃路ふ
○発月ハ白ハ秋ハ日ハ[illegible]ハよき舎釈也
○食糧を出〳〵いや〳〵けるる商白ハ[illegible]
所るハ遠所乃物〳〵ハ秘也
○二の表ハ[illegible]ハ〳〵く近ハ[illegible]四又白ハ問和[illegible]
人ハ[illegible]
○此更ハふ一荒の事節乃扱ハ和学ハを所ク〳〵
乃ハあり〳〵ハ國扇の〳〵の法数を高〳〵なるハ
扇五ク國扇高〳〵ハ秋の事ハ[illegible]

事國扇ハ[illegible]夫ハ〳〵法数近ハ[illegible]
[illegible]押かよ[illegible]ハ〳〵是ハ[illegible]
[illegible]理り扱〳〵事を扱ひ[illegible]

てかゝしや京ゝ[illegible]

蒲團ゝよりて　旅乃一曙　一氣

畑中し船乃荷物を揚させ

さも名月ゝ山乃　淋さよ

きてゝさのゝゝゝ構ゝゝ[illegible]

草　蓋　を　刈ゝ　急　ゝ

何事ゝ　唐ゝ　流乃道ゝゝ小

ゝ堀ゝゝ　いゝのゝゝ

ゝのゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ小ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

疫ゝと　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

姫の丈乃　延ゝ　十　四ゝ

いつゝの　ゝ見ゝ　ゝ月の

鹿　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

蔵

やうも獲又草は香ゑまとはれ

又大佛乃又ゆるあるりや

やきけるとろ何の花は世を踏

いまそ御まこ様とこのり也

二

家匠の鏡やいまんこあまと霜

盃はかせきゑ如ふらもれ

けあるり尾菁今竹と朝

風呂炭如とく薑乃ちろ

見身をかりみゑ本馬習はせる

法これ花乃ろこれ

ふつくり田ゑ為の志ろ

何ま罪ふゑ所ゑ町いらせ

世乃ろを仏ゑ仕ふ身の程よ

月も日ゑ世ゑ まろ 鶏

稲雲は面をかけ明のろ

初ろ京山るは人ろくしろ

二ウ

葉ごしも昧方に馳をあらへつる　嵐

断る乃中に赤ゝ嘯ゝ基　ゝ

家庵に為しるこゝのゝ夕眺　ゝ

猿走入る　峻乃岩

秋にたらくが形とゝ浮世の果桔花　ゝ

君は甥なる筆の始れつかれき河　ゝ

一 麦水云

○此発句　真に為本の候懇哉耳にあり　是も久
宮乃呂中にれも

○発句霧旅併ハ将前たる旭発句此旅に旅ハ古例制
せるると翁の山僧にも傍る付ハ此句旅の字形しておも
病子作者の勝を探し旅の字を服に去るゝハ制に
不似く還りて不句を聞ゝの意もあらんゝ

○惟意容易にしめ此意多し後覧にゆつりく不言ハそ
ゝ中に初心の間あり一横森にハあるといふゝり聞葺の香へ文大
佛の見ゆる此云句殊しいひとも横森にハあると點もいたし
今日此俳中詞の句や葺の香にまこひ岩打ち為撫る下
伝へて大佛の毫本のやうにさへられたり　緑ハ

汨の白きれハ禁の字ふあるゝ男ハ[illegible]を
者の例といふ

○稲妻の白ハよく見白きゝと云由表ふ功字なるも一白
[illegible]絶しゝ[illegible]ふ表白ある八蓮門の奥方也徳と附
白となせしも又作者ハ表[illegible]とゝしゝ[illegible]白勝ル

○表ふ都なる人より一瓶ふ文通しゝ此老[illegible]法しゝ山方ら
柳の白ハ伊勢山田ハ浦別とふ所の貞婦なるを翁此事
[illegible]の[illegible]集ふ[illegible]あるゝ八貪ふ[illegible]しゝ虚[illegible]と云ふ[illegible]白ふ
田中なるふまんら柳[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]
小方ら白を[illegible]ふ方丈の[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]
一瓶返ゝしゝ[illegible]白ら方丈の[illegible]ハ此浦別の小方ふハ[illegible]

中外伝といふ書四十三ヲ巻ふ出しを則ひらて[illegible]
小方ら入水せしゝ操[illegible]の柳乃事[illegible]白の字ハ
株[illegible]ふ[illegible]ふ吉を[illegible]中外伝ふ
右の[illegible]を書き[illegible]れしゝ氏座ふ[illegible]人[illegible]
[illegible]白[illegible]
[illegible]ふいふ[illegible]書[illegible]を[illegible]ふ記ス

○中外傳ノ中ニ曰

氏家某奉禄二万五千石ヲ賜リシ折ニアリシトニヤ勢州
ニ領知ヲ得城樓ヲ大ニシ且ツ青年ヲ縦ヽニナシ妻妾
多ク賜ヘテ廣式殊ニ賑ヒシニ或年ノ花ノ宴ニ一人ノ宮仕
ノ女ヲ見ル器量ヲホトヤカニ萬タケテ美容類ヒナカリシ
ガ白粉ノ賤シゲナルニ紅粉ヲ以テ小サ〻繪ヲ書タル小袖ノ

短尺ヲ イトハズ著テ傍ニ坐シ酒ヲ行ル氏家某是ニ戯レ
見ルニ形儀正シク一向ニウケヒカザルニ心恠ミテ傍ノ一婢ニ
對シテ彼宮仕カ志ヲ問フニ夫ハ何氏ノ娘ニテ候ガ云約束シ
タル夫鳥目萬匹ノ為ニ苦ムコト候テ引篭リ居申ヲ此女
其價ヲツクナフトテ宮仕ニ出テ身モ姿モ打忘レテ鳥
目ヲ求ムル人ニテ候万事約カニシテ衣服ナ涼料ヲ厭テ
自ラ紅粉ヲ以テ画イテ著タルニテ候餘リニ一筋ナル気ニ
一向萬匹ノ銭ヲ求メラレ候故ニ萬女即々トハ異名イタ
シ候ーニ氏家某弥懸想シイカニモノ慳ヲ手ニ入ン
ト忍ヒ折ヲ求メ種々媒ヲ入テ愛情ヲ推フトイヘ
不靡氏家某兎角ユ夫シテ一夜則萬女即テ問ニ
招キ則一紙ニ大判ヲ包ミ是ニ示メ申ケルハ汝萬匹ノ為

ノ為ニ志ヲ苦シムルト云一匹ハ十銅十匹ハ百銅ヨ百
匹ハ一貫ニシテ萬匹ハ百貫文也此黄金一牧ハ千五
百匹ニ當レハ黄金四牧ハ則萬匹ノ科也我是ヲ汝ニ
アタヘン間暫ク我ニ朝雲暮雨ノ情ヲ許セ汝是ヲ沮ンデ
日々ニ幾ノ鳥目ヲ貯ルモ其間ニ日往キ月遇テ汝カ顔色モ皺
ヲ生シ其身モ青年ノ楽ヲ失ハバ志シ豈化トナラン汝今日我ニ
情ヲユルセハ明日起ト世ニ楽ムソレ是ニ志ナキカ萬女即面
テ火ノ如ク袖ヲ覆ヒ恥カシゲニ四牧ノ黄金ヲ取テ懐中
ニ泣テ申ケルハ君ガ奇策ヨク妾ガ百年ノ命ヲ失ハンム
是 妾ニ止ム事ヲ得サラシムルナリ我日々ニ鳥目ノ積ルヲ
見テ楽ム心花下ノ宴ノ如シ然ルニ今夜此議論ヲ聞テ
明日夫ガ笑顔ヲ見シ事ヲ欲レハ昨日迄ノ楽ハ皆卑苦

トナル我君ヲ不レ怨ミトイヘ𪜈人ヲシテ不義ニ陷シ入ラシム
其罪必ズ報ヒテ我如クニ君モ終リ玉ハン必ス志ヲ改メテ
世ヲ善々トメ行ヒ玉ヘト泣入テ倒レ面モモタゲ得ズ髪
乱レテ前ニ飯ル氏家某猶心強ク右ノ手ヲ襟ニ入レテ
引上ケ抱キツテ終ニ其夜寢床ヲ倶ニシテ返ス翌日萬
女郎下ツテノ夫ノ家ニ来リ此四牧ノ黄金ヲ投シ則夫ニ
告ゲ餘所ナガラ今世ノ暇ヲ申シ来世ヲ頼テ去ル夫其志
ヲ悟ラス恠ミナガラモ明夜ヲ約シテ別ル翌夜待テ𪜈不来ラ
夫ト恠シミノ尋ケルニ後苑ノ水中ニ身ヲ投シ既ニ息絶
テ程久シ夫大イニ哀ミ厚ク葬リ岸ノ柳下ニ碑ヲ築テ
是ヲ祭ル勢州ノ人聞傳テ義婦トシ身ヲ汚シテ夫ノ
為ニスル者ヲ皆称号メ萬女郎ト云 其比海道関ノ
地蔵ノ邊ニ驛亭ノ遊女ニ義理ノ父テ名高キ婦アリ
故ニ世人トナヘテ小萬ト云今妓場ニ折々称スル関ノ小萬ト
云是也去レハカノ黄金四牧義婦小萬皆海道ノ常話ト
ナリ今ニ傳ヘテ諷ハレム其比又勢州山田ノ郷浜洲ト云所ニ
一人ノ義婦アリ夫ノ貧ヲ守ル苦ヲ見ルニ忍ヒス袖引
ル人ニ蔑言ヲ無レ設ケテ黄金ヲ得タリ是ヲ夫ニ献
ス其夫トサフニ不悅ヒシテ曰清貧ヲ守ルハ士ノ常ナリ道
無キノ求メハ我セジト妻此詞ニ恥テ其アタヘシ人ニ金
ヲ返サントシ追ニ其人去ツテ不及ハ妻恥テセン所ヲ不知
終ニ金ヲ投捨テアタリノ古井ニ入ツテ死ス世人ソノ義
ニ感スヲ大イニ悼ミ感シテ此所ノ田ヲ買イ求メ一
寺ニ寄附シテ冥福ヲ吊ライ田中ニ柳ヲウヘテ

卯シトシ則チ小萬カ 柳ト云 下略

聯合學園
短大
第 662 號
受入
昭 36. 3. 14 印